

藤田のぼるの
「童話作家のアイウエオ」

【カ】 柏葉幸子さん

「童話作家のアイウエオ」も、今回からカ行に入ります。これも『魔女の宅急便』の角野栄子、『くまの子ウーフ』の神沢利子など目白押しですが、紹介するのは、ファンタジーの代表的な書き手である柏葉幸子さんです。柏葉さんは、岩手県花巻市の出身（宮沢賢治の生家にも近いとか）で、現在も盛岡にお住まいです。デビュー作の『霧のむこうのふしぎな町』は、講談社児童文学新人賞の入選作で、この時はまだ東北薬科大学に在学中でした。この作品は、「千と千尋の神隠し」のベースになったことでも有名です。

6年生のリナが、夏休みに一人で東北の村を訪れるのですが、迎えはなく、山道の途中で不思議な町に迷いこみます。最初に入った屋敷が下宿屋で、そこのおばあさんから、「自分の食いぶちは、自分で働け」と、いろいろな店に働きに行かされます。「千と千尋の神隠し」の原作というわけではないのですが、シチュエーションは確かに似ています。二作目の『地下室からのふしぎな旅』では、薬剤師で

ある主人公のおばあさんの家の地下室が、異世界との通路になります。実は、日本のファンタジーは、その先駆けともいうべき佐藤さとるの『だれも知らない小さな国』を始めとして、この世界のどこかに不思議な存在が隠れている（あるいは正体を隠している）というタイプのものが多かったのですが、柏葉さんの登場によって、主人公が、この世界から異世界に迷い込む、「ナルニア型」のファンタジーも多く書かれるようになりました。

しかし、その柏葉さんご自身は、次々と、いう感じで、新しいタイプの作品を生み出しています。中でも僕が好きなのは、『ミラクル・ファミリー』『ブレーメンバス』という、二つの短編集です。いずれも昔話をモチーフにしているのですが、ファンタジーとリアルの境目を縫うような、独特な作品世界です。中でもお勧めは、『ミラクル・ファミリー』の中の『鏡よ、鏡……』、そして『ブレーメンバス』の表題作でしょうか。後者は、孫たちを育てあげ、田舎の家に帰ろうとバスを待っている



「岬のマヨイガ」
講談社刊
柏葉幸子／作 さとうゆきこ／絵

たおばあさんが、バス停で年代の異なる三人の女性たちと出会い、田舎の家に誘おうとする話で、「ブレーメンの音楽隊」が下敷きになっていきます。実は、昨年の野間児童文学賞を受賞した『岬のマヨイガ』は、東日本大震災を題材にした作品ですが、震災で（という言い方は微妙に正確ではないのですが）家族を失った三人の女性たちが、新たな家族を創り上げていく物語で、「ブレーメンバス」のモチーフがこんなふう展開されていることに驚かされました。その他、「モンスタースターホテル」などのシリーズも含め、目が離せない作家の一人です。

◇藤田のぼる（ふじたのぼる）

1950年秋田県生まれ。児童文学評論家・作家。日本児童文学者協会副理事長。聖学院大学他講師。著書に『児童文学への3つの質問』（てらういんく）、『少年少女の名作案内 日本の文学』（共編、自由国民社）『場所』から読み解く世界児童文学事典』（共編著、原書房）など、創作作品に『山本先生新聞です』（岩崎書店）、『鍬を上げて』（文溪堂）『みんなの家出』（福音館書店、2014年度産経児童出版文化賞フジテレビ賞）などがある。小学校国語教科書編集委員、NHK学校放送企画委員なども務める。